

源氏物語系箇之大事

一 条禪院所作源語秘訣は二ヶのみ  
微細く書換なりといふ古来秘して  
調法をくといふも惑説多く當流  
不用くといふ書近來因板して  
流布に

夕白卷  
揚名女

親王御領地(河家頼子成てり)  
親王御領分と申ハ山城常陸上総  
上野は口ヶ國ハ限り也は外つても  
必の女ハ成て其國の守なりゆ  
職分職田等得分有事をなれとも  
たのしく此等輕くなりてり左  
御代官あるハ女といふ名を揚たら  
はるれ先竹の揚分たるありまを





はるかに先竹の樽分ちたるありまを  
揚名女といふかりり他の任國もあけ  
ち竹の守と名乗ればさへ國親と  
則國守ゆゑもといふもなむは  
故に往古以来常陸も上総も上野  
もと、俾とせしむの時代より誤と  
山城守といふ号もあり

葵卷  
二のつは

古來の説も銀器に杯も盛たるは  
にといひまゝに杯一具の心かとりま  
二のつはといふも後おれともある  
的中をわづらひなりこのおま後後  
禪園の説も銀器に杯も盛たるは  
源氏の志と一對嫁娶の女姓のことはるの上一對  
ゆてに杯なりといふは是古來より極り  
たはるなりなれは惟光志といたると  
なりまといふも杯なりこれと  
用ひん

當流と二のつは夜の條と男は年數を  
わづらひ一對女の年數と盛て一對



わりのく一對女の年数と感して一對  
都く結器に保てあやめていばは氏  
いじりあふにえ身條の敷きつたる  
事なく年數のむかひは由深氏の  
此子と惟らんか知らるるの業上は  
業成るといふもあつて深氏(と)  
なり阿の此子よとほは深氏のま  
う〜かぢさんとそまのまぢあへる日  
なれち

物鏡の句

相も縁のこゝろくつゝつゝつゝつ  
おに強うゆるむとゆめたる  
ゆをいこゝろくつゝつゝつゝつ  
阿ん〜この〜ゆめあへ  
ろ〜ゆめあへ

は東家の年十四なれち十七つは  
おのろくに口さいじり字なれは  
かえ〜のよとあ〜と深氏  
と〜〜〜〜〜〜ゆめあへ  
もし〜〜〜ゆめあへてあやせ  
ま〜〜物鏡の前はへりもそよを  
まゆらにほや 又右の行よあり真  
物鏡の句  
今ちちの〜ゆめあへ



字のゆりこは後也 又右の符もあり真

物類の目

今からゆりこいませ給へ  
とて後へ

と何れはふら銀意杯の文字あり  
たよおあをり

賢本巻

### 宿直物の袋

古来と異なりあうくしてことごと  
秘したるしう故にこれをいふも  
なりしと

當流正説の宿直物の袋の形  
なと入る今世の番袋

院の所在世の時と源氏の所所多く  
所附ありしとあつたあつた  
ゆくりとあつたあつた袋あつた  
んくはと時代をけりて源氏の法  
威執事長たつたあつたは  
乃依りてしと秘とる事なり

後撰系雜奇一

雅正の宿直物ととりたりと

大補りのしとあつたあつた

けしと

大補

ゆりこいませ給へ



けしち

大捕

ゆるさしものなるはま古のしるしを  
なほよもりしるしはゆめくあり

ぬ

雅正

あふらふとふらふとふらふと  
よ我らあわわわわわわわわ

右二箇く大事釣月老師教

年熟りししまりをれもどく

清ゆりなごりしと今年暮る

しるしに持築 大社八景乃和歌

類のこめ都のちりしはめり

首途しはるんしるしは明珠庵

へ海のあし又月日給んしるし

なもまきしをれしとわらなはる

あかりして霧旅のいとなまけき

なるはあ密なる一間あ入て相傳か

なもあね鏡中揚名女二つうつ

のしるし至極の真秘なれと古味  
よあしちのけゆらしとあしと



たすむぬ釣中揚名女二つうりつ  
のりへ至極の真秘なれは古来  
よむとちの成ゆゑにいふとれ左  
釣とこれと傳へるもよめしすの  
水そりたしなくはにはうらまを  
たすむぬかく釣戒と書かると  
いふも記憶ふんをれはかりの如き  
乃何まかりをうらに粗書付たりぬ  
是をうら<sup>うら</sup>百分うらうらしては決まとう  
もはらして行書とていふはうら  
とくわし穴貫ここ

于時享保十二年丁未孟夏廿夜  
拾明珠庵傳之者也  
勝郷



